

令和元年度 自 己 評 価 表（中間評価）

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり（キャリア教育の推進） － 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 －	今年度の 重点目標	①学力の向上:学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現:進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成:生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進:青谷学・課題探究の充実、地域行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進:時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	--	--------------	--

年 度 当 初					評 価 結 果（10）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 学力の向上	(学びへの意欲向上) ・授業改革(タブレット端末等ICTを活用した授業実践)の推進 ・授業規律の向上	・タブレット端末を利用して授業を行った教員は67. 9%。 ・iPadを活用した授業についてのアンケートで、意欲的に取り組めたと肯定的に回答した生徒は67. 9%。 ・授業規律は概ね良いが、授業に対する意欲が不足している生徒がいる。 ・授業に遅刻し、入室許可書の累積枚数が6枚以上となった生徒が8名。	・多くの教員がICT等を用いて、分かりやすい魅力ある授業実践に取り組んでいる。（【指標①】ICT等を利用して授業を行う教員が70%以上）（【指標②】ICT等を活用した授業の実施によって学習意欲が向上する生徒が70%以上） ・生徒が意欲的に授業に取り組んでいる。（【指標③】アンケートで「思う」とする割合が5ポイント増加）（【指標④】入室許可書累積枚数6枚以上は0人）	・ICT等を活用した公開授業を各教科で実施する。 ・ICT等活用職員研修を実施する。 ・公開授業週間を活かして魅力ある授業づくりに努める。 ・生徒との面談をとおして学ぶ意欲を向上させる。 ・授業開始時の「本時の目標」の明示を徹底する。 ・入室許可書の厳格な運用とこまやかな指導。	・全ての教科でICTを活用した公開授業を計画(9月末段階で3名実施)。 ・竹中章勝氏を講師に招き、ICT職員研修を実施した。 ・公開授業週間に職員が授業を相互参観した回数が大幅に増加した。 ・授業評価アンケートで、授業の分かりやすさや教材の工夫などに対する生徒の評価が昨年度より向上した。 ・生徒面談は定期的に実施した。 ・「本時の目標」の明示を心がけているが、十分とはいえない面もある。 ・9月末現在、 入室許可書の累積枚数が6枚以上の者は0人。	C	→計画通り実施し、分かりやすい魅力ある授業づくりに継続して取り組む。 →学ぶ意欲の向上に繋がる面談を心がける。 →全授業で実施を目指して継続して取り組む。 →厳格な運用とこまやかな指導に継続して取り組む。
	(基礎学力の充実) ・学び直しの実施 ・家庭学習の定着	・基礎力診断テストのDゾーンの生徒の割合が減少している教科もあるが、まだ十分とはいえない。 ・各教科で課題等を出し、家庭学習時間が増加するよう取り組んだが、十分な成果が出ていない。	・基礎学力の定着がみられる。（【指標⑤】基礎力診断テストの各教科のDゾーンの生徒の割合が年度当初より5ポイント減少） ・家庭学習時間が増え、授業の予習、復習をする習慣が定着している。（【指標⑥】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント増加）	・国語の学びなおし教材や学校設定科目(基礎数学・基礎英語)を効果的に活用して、学びなおしに取り組む。 ・それぞれの教科で家庭学習の課題を工夫することで取り組みやすい状況を設定し、提出点検を徹底する。	・計画的に学びなおしに取り組んでいる。 ・9月実施の第2回基礎力診断テストでは、1年次の3科総合と国語、2年次の3科総合・国語・数学でDゾーンの生徒の割合が5ポイント減少した。 ・自宅学習時間は、1学期の調査では昨年度よりやや増加したが、一日平均1時間未満の生徒の割合が依然として多い。 ・1年次で毎日自学に取り組むという新しい試みを始めた。	C	→継続して取り組む。 →面談等も活用しながら、家庭学習の時間が増えるような取り組みを実施する。
2. 進路の実現	(進路意識の向上) ・進路に関する取組の充実 ・進路体験(オープンキャンパス・インターンシップ)の充実 ・面談、事前事後指導の充実	・進路に関する講演等に対する生徒の評価がまだ低い。 ・インターンシップは組織的に指導を行い、充実してきているが、オープンキャンパスの指導は不十分である。 ・時間を確保して面談、事前事後指導に取り組んだ。 面談時に必要な進路情報の提供が不十分ある。	・進路に関する行事や講演を通して生徒の進路意識が向上している。（【指標⑦】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上） ・充実した進路体験を通して、生徒の進路意識が向上している。 ・進路選択(進路体験先の選択も含む)に必要な情報が十分に生徒・保護者に提供され、進路意識が向上している。	・生徒にとってより効果的なものとなるように、進路行事・講演の精選を検討する。 ・多様な生徒に対応するため、外部機関とも連携する。 ・進路指導部が、生徒の進路選択に必要な企業や上級学校のデータをいままで以上に集め、年次に提供する。 ・面談、事前事後指導に必要な時間の確保に継続して取り組む。	・進路行事の精選とまではいかなかったが、行事の内容やつながり、実施方法について、一つ一つ確認をしながら実施した。 ・外部機関との連携はハローワークのみにとどまった。 ・情報発信についてはスピード感と資料配付の範囲拡大を心がけた。 ・教務部・年次団と連携して面談等の時間を確保した。	C	→進路部会を開催し行事の内容や時期を検討する。 →生徒の進路実現のため、今後さらに外部機関との連携を図る。 →進路で保持するデータをまとめ直しながら、企業や上級学校の研究を行う。 →積極的に外の研究会や学校説明会に足を運ぶ。 →継続して取り組む。
	(進路指導の充実) ・早期の進路目標の明確化 ・進路実現に必要な学力の育成	・進路未定の生徒が10%以上いる。 ・昨年度は例年より就職率が高く、進学した者が少なかった。 ・模試を積極的に受験する生徒が少ない。	・2年次末には明確な進路目標を持っている。（【指標⑧】進路希望未定の生徒が1年次末で10%未満、2年次末で5%未満） ・生徒の学力が向上し、進路選択の可能性が広がっている。（【指標⑨】第3回基礎力診断テストでBゾーン以上の生徒の割合が10%以上）	・日々の声かけの実施。 ・進学補習の受講を促す。 ・外部模試の積極受験を促す。	・日々の学習活動、LHR等を通して将来を模索させた。 ・第2回進路希望調査(9月)では、1年次の未定者は21人(24.1%)で第1回(4月)より増加し、2年次の未定者は6人(9.5%)で第1回とほぼ同じだった。 ・第2回基礎力診断テストでは、2年次の3科総合・国語・数学でBゾーン以上の生徒が増加し、割合が10%を超えている。 ・平日補習の参加が少なく、個別の対応をした。 ・外部模試については、年次が積極的に声をかけている。	D	→進路希望調査の一層の活用。 →未定者への指導の充実。 →進路指導部、CAによる早期面談。 →平日補習に変わる仕掛けを検討。 → 3年次での模試の受け方は1. 2年次までの指導で決まるので低年次での指導の充実。 →年次会議の充実のための資料提供。
	(生活習慣の確立) ・学校の日課表に沿った規則正しい生活の実現 ・整理・整頓・清掃(3S)の励行	・遅刻者数は減少しているが、欠席者数が増加している。 ・教室内での自身の荷物の整理が十分でない。(机上や床) ・ごみの分別がまだ不十分である。	・学校を中心に据えた行動意識が醸成され、学校生活のルールに基づいた生活習慣が定着している。（【指標⑩】欠席率・遅刻率が2.00%未満） ・身の周りの整理・整頓ができ、学習環境を整える習慣が定着している。（【指標⑪】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より3ポイント向上）	・本人への指導は時間を置かずに適宜行う。 ・保護者への連絡を密にする。 ・各授業時に荷物の整理を促し、指導していく。	・本人、保護者への連絡は密にできている。 ・9月末段階の欠席数は昨年同期に比べて大幅に増加し、欠席率は2.61%だった。遅刻数はやや増加したが、遅刻率は1.37%で昨年度より下がった。 ・3Sの実行については、徹底できていない面がある。	C	→継続して本人、保護者両者への連絡を密にしていく。 →一日の始まりであるSHRにおける指導を徹底していく。(正・副担任協力)

3. 社会人基礎力の育成	(マナー・作法の向上) ・身だしなみ・あいさつ・言葉遣いの向上	・制服の着こなしが大きく崩れた生徒はほとんどいない。 ・朝から元気よく挨拶できる生徒はまだ少ない。 ・TPOに合わせた言葉遣いができない生徒がいる。	・他者を意識し、身だしなみや行動を整えることができる。【指標⑫】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上) ・相手のことを思い、自発的に挨拶ができるようになる。【指標⑬】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上) ・TPOに応じた正しい言葉遣いができている。【指標⑭】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上)	・時を逃さず、タイムリーな指導を心がける。 ・まずは教職員の方から元氣よく挨拶をしていく。 ・生徒会執行部による定期的な挨拶運動を継続して行う。 ・分からない、出来ていない生徒に対しては、その場で理解させるように教職員が協力して指導する。	・制服の着こなしで、大きな崩れはない。 ・教職員からの挨拶・声掛けはできている。 ・執行部による挨拶運動は、定着できなかった。 ・職員室内で、教職員が生徒の挨拶・身だしなみ・言葉遣いをこまめに指導する姿が例年以上に見られた。	C	→継続してタイムリーな指導に心がけていく。 →継続して教職員の方から積極的に挨拶・声掛けをしていく。 →執行部の交代に伴って、活動計画を見直し、実施していく。
	(自己肯定感の育成) ・人権教育・特別支援教育・性教育・食育などの取組の充実 ・褒める活動の実践 ・部活動の活性化 ・ボランティア活動の活性化	・外部人財も活用し、生き方あり方に関する多くの講演会やLHR等を実施。 ・特別支援教育等の教員研修を実施。 ・褒める実践が不十分。 ・部活加入率が低く、部員数不足の部もあり、部活動の活性化に課題がある。 ・多くの生徒がボランティアに参加したが、生徒の主体的活動の広がりは不十分である。	・そのままの自分を認め、自分を尊重し、自己価値を感じて自らを肯定するとともに、他者の存在価値も認め、自他共に尊重し合える力が身についている。 ・教職員の褒める実践力が向上している。 ・部活加入生徒の満足度が高まる。【指標⑮】アンケートで「思う」とする割合が昨年度より3ポイント向上) ・全校生徒の5割以上がボランティアに参加している。【指標⑯】	・生き方あり方に関する講演等を精選し、より効果的なものにする。 ・生徒が主体的に取り組むように積極的に働きかける。 ・事前、事後指導を充実させる。 ・職員研修等を充実させ、生徒の指導に生かす。 ・顧問間で部活動業務を分担し、指導する。 ・各部で目標を設定する。 ・ボランティア情報の広報・掲示方法等を工夫する。	・いのちの講演会で、自己肯定感を高めた生徒がいたことが感想文を通じて感じられた。 ・特別支援教育の職員研修では、具体的な事例について学び、個々の生徒について指導の共有化をはかることができた。 ・7月22日に柏原拓史氏(だっぴ代表理事)を講師に招き職員研修を行い、9月12日には1年次生参加の「だっぴ」を開催。 ・10月29日に高野登氏(前リッツカールトンホテル日本支社長)を講師に招き、職員研修を実施。 ・褒める実践については、職員間での共通理解が不十分である。 ・3年次生が引退して各部とも部員数が少なくなったが、それぞれが設定した目標に向けて努力している。 ・全体へのアナウンスだけでなく、個別の声掛けも行った。	C	→引き続き、様々な講演会を通じて自己肯定感を高める。 →褒める実践について、具体的に職員で共通理解をはかる。 →部活未加入生徒への声掛けを行っていく。 →継続して全体、個別の声掛けを行っていく。
4. 地域連携の推進	(青谷学・課題探究の充実) ・地域への関心の高まり ・成果の発表	・青谷学・課題探究の学習・活動をととして、生徒の地域への興味関心が高まった。 ・課題探究成果発表会を青谷町総合支所の施設を借り、地域の方を招いて実施した。 ・「青谷高校活性化を支援する会」の協力で社会人講師が充実した。	・生徒の地域への関心が高まり、主体的に地域に参画・貢献する姿勢・態度が養われている。 ・青谷学や課題探究の取組を通して、生徒のコミュニケーション力、プレゼンテーション力が向上している。 ・青谷学や課題探究の取組に対する地域の理解が深まり、地域からさらなる協力が得られている。	・地域の資源の活用方法や地域課題の解決方法を考案し、地域に提案する。 ・3年次の課題探究で地域資源の活用方法を実践する。 ・課題探究成果発表会を地域の多くの方に公開して開催する。 ・青谷学の成果発表としてポスターセッションを実施をする。	・課題探究において、地域資源の活用方法や地域課題の解決方法の考案、提案し、地域から協力を得ている。	C	→課題探究は12月に、青谷学は2月に成果発表をそれぞれ実践する。
	(地域行事への参画・参加) ・生徒の地域行事への参加数増大 ・生徒の充実感・有用感の高まり ・地域からの生徒・学校への信頼・期待の高まり	・地域行事に参加した生徒が前年度より増加した。 ・ボランティアに参加した生徒の多くが、充実感・有用感を感じている。 ・生徒のボランティア活動等に対して、地域の方から肯定的な評価をいただいている。	・地域活動に50%以上の生徒が参画・参加している。【指標⑰】 ・地域活動をととして、参加した生徒の80%以上が有用感を実感し自己肯定感を高めている。【指標⑱】 ・地域活動に関わった地域の方の80%以上から肯定的に評価されている。【指標⑲】	・青谷学で、地域行事でのボランティア活動参加を推進する。 ・課題探究の実践活動を全てのグループが実施する。 ・スローガン入りのポロシャツを作成し、地域活動への参加意識を高める。 ・地域活動参加時の心得として、社会人として身につけておくべきルール・マナーについて事前指導する。	・9月1日現在で2年次生は、地域行事のボランティアに約7割が参加している。 ・地域活動ボランティアに参加した生徒の多くが充実感・有用感を感じている。 ・生徒の地域行事でのボランティアに対して、地域の方から概ね高い評価をいただいている。 ・10月29日に課題探究の「実践」活動として、「あおこうまるしえ」を実施。 ・ポロシャツは、地域行事のボランティア以外にも着用し、青谷高校生としての自覚が高まっている。 ・ボランティア参加前に説明会を実施し、ルール・マナーについて指導しているが、無断欠席及び遅刻が毎回ある。	C	→引き続きボランティア説明会でのルール、マナーについての指導をする。
	(保育園・小学校・中学校等との連携) ・すくすく保育園、青谷小学校、青谷中学校との連携 ・「青谷高校活性化を支援する会」、青谷町総合支所との連携	・すくすく保育園と青谷小学校との連携は進んでいるが、青谷中学校との連携が十分にできていない。 ・青谷町総合支所を中核とした、「青谷高校活性化を支援する会」等の地域の諸組織との連携がとれ、本校へのさまざまな支援をいただいている。	・すくすく保育園、小学校、中学校との連携の内容が充実している。 ・すくすく保育園のボランティア参加者が昨年度より増加している。 ・「青谷高校活性化を支援する会」等で定期的な意見交換が行われ、地域の協力が得られている。	・青谷中学校との連携のあり方を検討する。 ・教科、進路部、年次等と連携して、保育士や幼稚園教諭を目指している生徒への参加を呼びかける。 ・「青谷高校活性化を支援する会」及び「青谷地域にぎわい創出事業」の会合等へ出席し、本校の取組みを報告し、地域人財の情報や実践活動の協力あおやを得る。 ・課題探究の実践活動で青谷の良さをPRする。	・青谷中学校と教科指導における連携を図り、公開授業週間では青谷中学校教員3名が来校し、授業を参観した。 ・陸上部が青谷小学校と陸上合同練習会を実施した。 ・前期のすくすく保育園ボランティア参加者は、5名(昨年は4名)であった。 ・「青谷高校活性化を支援する会」及び「青谷地域にぎわい創出事業」の会合等へ出席し、さまざまな面で協力を得ている。 ・青谷高校活性化を支援する会主催の卓球講習会に卓球部員がボランティアとして参加し、小学生から高齢者までの地域の卓球愛好者の指導を行った。	C	→引き続き青谷中学校との連携を検討する。

	(広報活動の推進) ・ホームページの充実と更新 ・地域や中学生などへの情報発信	・HPのデザインを一新し、迅速な更新を行っている。 ・学校のポスターを作成し、市内各所に掲示していただいた。 ・「あおこうだより」を計4回発行した。 ・PTA広報誌は4回発行した。 ・「青谷町総合支所だより」に、隔月ペースで本校の記事が掲載された。	・HPの閲覧者数が増加している。 ・学校のポスターや「学校案内」「あおこうだより」「青谷高総合支所だより」等による情報発信を通じて、中学生や地域の方の本校への興味関心を高まっている。	・HPが閲覧者がより見やすく利用しやすいものになるように継続して取り組む。 ・HPを更新できる職員をさらに増やす。 ・新しいポスターを作成し配布する。 ・「学校案内」「あおこうだより」を広く配布する。 ・「青谷町総合支所だより」で本校の魅力を積極的に地域に発信できるよう	・HPが閲覧者がより見やすく利用しやすいものになり、閲覧者数が増加している。 ・HPを更新できる職員が増え、滞ることなく最新のものを提供できている。 ・「学校案内」「あおこうだより」の配布範囲を広げた。 ・「青谷町総合支所だより」6月号、8月号、10月号への情報提供を行っている。	B	→引き続き新しい取組等を地域に発信する。 →HPを更新できる職員の増加に継続して取り組む。
5. 業務改善の推進	(時間外業務時間の縮減) ・時間外業務時間縮減の推進	・時間外業務時間の全体平均は少ない。 ・昨年度の目標、前年度比10%減は未達成。 ・月45時間以上の延べ人数が増加。	・時間外業務時間縮減によって教職員が健康で、教育活動が充実している。 (勤務時間終了(16:55)後、1時間以内に退勤) (月80時間以上の者0人)【指標㉔】 (教職員の年休取得が平均年15日) 【指標㉕】	・管理職による勤務状況の把握。 ・管理職からの日常的声かけの実施。 ・時間外業務等、教職員の状況の報告。	・職員会議で衛生委員会報告として時間外業務の状況等を報告した。 ・4～9月の時間外業務時間の縮減は目標には達していないが、月80時間以上だった者は0人で、月45時間以上だった者の延べ人数は11人で、前年度から大幅に減少した。 ・長期休業期間や定期考査期間等に年休を取得することを奨励した。	C	→継続して取り組む。
	(学校行事等の見直し) ・学校行事等の精選	・多くの行事・講演等が行われ、生徒・教職員に負担感もある。	・行事の見直しが実施され、生徒・教職員の負担感が軽減されている。	・諸行事等の優先順位の洗い出し。 ・重複する内容の行事の見直し。	・「いのちの講演会」を「人権教育講演会」と兼ねて実施した。	C	→継続して取り組む。
	(部活動の計画的実施) ・部活休養日の適正な実施 ・顧問間の部活業務分担	・多くの部が週1日休養日を設けている。 ・部顧問による部活業務の分担を推進しているが、まだ改善の余地がある。	・年間計画・月間計画に基づいて、適正に部活動の運営が行われている。	・管理職による各部の活動状況の把握・指導。	・毎月、各部が活動計画及び実績報告をきちんと提出し、「部活動に係る方針」の規定を概ね守って活動している。	C	→継続して取り組む。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し

[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]